034

日蓮大聖人御書全集

聖愚問答抄 上下

しょうぐもんどうしょうじょうげ

新版544～581

聖愚問答抄上

文永5年（'68）　47歳

夫れ、生を受けしより死を免れざる理は、賢き御門より卑しき民に至るまで人ごとにこれを知るといえども、実にこれを大事としこれを歎く者、千万人に一人も有りがたし。無常の現起するを見ては疎きをば恐れ親しきをば歎くといえども、先立つははかなく留まるはかしこきように思って、昨日は彼のわざ今日はこのこととて、いたずらに世間の五欲にほだされて、白駒のかげ過ぎやすく羊の歩

み近づくことをしらずして、空しく衣食の獄につながれ、いたずらに名利の穴におち、三途の旧里に帰り六道の巷ちまたに輪回せんこと、心有らん人、誰か歎かざらん、誰か悲しまざらん。

ああ、老少不定は娑婆の習い、会者定離は浮き世のことわりなれば、始めて驚くべきにあらねども、正嘉の初め世を早うせし人のありさまを見るに、あるいは幼き子を振捨ふりすて、あるいは老いたる親を留めおき、いまだ壮年の齢にて黄泉の旅に趣く心の中、さこそ悲しかるらめ。行

くもかなしみ、留まるもかなしむ。彼の楚王が神女に伴いし、情けを一片の朝の雲に残し、劉氏が仙客に値いし、思いを七世の後胤に慰む。予がごとき者、底に縁って愁いを休めん。「かかる山左のいやしき心なれば、身には思いのなかれかし」と云いけん人の古事さえ思い出でられて、末の代のわすれがたみにもとて、難波のもしお草をかきあつめ、水くきのあとを形のごとくしるしおくなり。

悲しいかな、痛ましいかな。我ら無始より已来、無明の酒に酔って六道四生に輪回して、ある時は焦熱・大焦熱の

炎にむせび（咽）、ある時は紅蓮・大紅蓮の氷にとじられ（閉）、ある時は餓鬼の飢渇の悲しみに値って五百生の間飲食の名をも聞かず。ある時は畜生の残害の苦しみをうけて、小さきは大きなるにのまれ（呑）、短きは長きにまかる（巻）。これを残害の苦と云う。ある時は修羅の闘諍の苦をうけ、ある時は人間に生まれて八苦をうく。生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦等なり。ある時は天上に生まれて五衰をうく。かくのごとく三界の間を車輪のごとく回り、父子の中にも、親の親たる、子の子たることをさとら（覚）

ず。夫婦の会い遇えるも、会い遇いたることをしらず。迷えることは羊目に等しく、暗きことは狼眼に同じ。我を生みたる母の由来をもしらず、生を受けたる我が身も、死の終わりをしらず。

ああ、受け難き人界の生をうけ、値い難き如来の聖教に値い奉れり。一眼の亀の浮き木の穴にあえるがごとし。今度もし生死のきずなをきらず、三界の籠樊を出でざらんこと、かなしかるべし、かなしかるべし。

ここに、ある智人来って示して云わく、汝が歎くところ

実にしかなり。かくのごとく無常のことわりを思い知り善心を発す者は、麟角よりも希なり。このことわりを覚らずして悪心を発す者は、牛毛よりも多し。汝早く生死を離れ菩提心を発さんと思わば、吾最第一の法を知れり。志あらば、汝がためにこれを説いて聞かしめん。

その時、愚人座より起って掌を合わせて云わく、我は日来外典を学し風月に心をよせて、いまだ仏教ということを委細にしらず。願わくは上人、我がためにこれを説き給え。

その時、上人の云わく、汝、耳を伶倫が耳に寄せ、目を離朱が眼にかって、心をしずめて我が教えをきけ。汝がためにこれを説かん。

夫れ、仏教は八万の聖教多けれども、諸宗の父母たること、戒律にはしかず。されば、天竺には世親・馬鳴等の薩埵、唐土には慧曠・道宣といいし人、これを重んず。我が朝には人皇四十五代聖武天皇の御宇に、鑑真和尚この宗と天台宗と両宗を渡して、東大寺の戒壇これを立つ。しかしてより已来当世に至るまで、崇重年旧り尊貴日に新た

なり。なかんずく極楽寺の良観上人は、上一人より下万民に至るまで、生身の如来とこれを仰ぎ奉る。彼の行儀を見るに、実にもってしかなり。飯島の津にて六浦の関米を取っては諸国の道を作り、七道に木戸をかまえて人別の銭を取っては諸河に橋を渡す。慈悲は如来に斉しく、徳行は先達に越えたり。汝、早く生死を離れんと思わば、五戒・二百五十戒を持ち、慈悲をふかくして物の命を殺さずして、良観上人のごとく、道を作り橋を渡せ。これ第一の法なり。汝持たんや否や。

愚人いよいよ掌を合わせて云わく、能く能く持ち奉らんと思う。つぶさに我がためにこれを説き給え。そもそも、五戒・二百五十戒ということは、我らいまだ存知せず。委細にこれを示し給え。

智人云わく、汝は無下に愚かなり。五戒・二百五十戒ということをば、孩児もこれをしる。しかれども、汝がためにこれを説かん。五戒とは、一には不殺生戒、二には不偸盗戒、三には不妄語戒、四には不邪淫戒、五には不飲酒戒、これなり。二百五十戒のことは多きあいだ、こ

れを略す。

その時に愚人、礼拝・恭敬して云わく、我、今日より深くこの法を持ち奉るべし。

ここに予が年来の知音、ある所に隠居せる居士一人あり。予が愁歎を訪わんために来れるが、始めには往事渺茫として夢に似たることをかたり、終わりには行く末の冥々として弁え難きことを談ず。鬱を散じ思いをのべて後、予に問うて云わく、そもそも人の世に有る、誰か後生を思わざらん。貴辺いかなる仏法をか持って出離をねがい、また亡者

の後世をも訪い給うや。

予答えて云わく、一日、ある上人来って、我がために五戒・二百五十戒を授け給えり。実にもって心肝にそみて貴し。我深く良観上人のごとく、及ばぬ身にも、わろき道を作り、深き河には橋をわたさんと思えるなり。

その時、居士示して云わく、汝が道心貴きに似て愚かなり。今談ずるところの法は、浅ましき小乗の法なり。されば、仏は則ち八種の喩えを設け、文殊はまた十七種の差別を宣べたり。あるいは蛍火・日光の喩えを取り、あ

るいは水精・瑠璃の喩えあり。ここをもって三国の人師も、その破文一つにあらず。

次に行者の尊重のこと、必ず人の敬うによって法の貴きにあらず。されば、仏は、「法に依って人に依らざれ」と定め給えり。我伝え聞く、上古の持律の聖者の振る舞いは、殺を言い収を言うには知浄の語有り、行雲廻雪には死屍の想いを作す。しかるに、今の律僧の振る舞いを見るに、布絹・財宝をたくわえ、利銭・借り請けを業とす。教行既に相違せり。誰かこれを信受せん。

次に道を作り橋を渡すこと、還って人の歎きなり。飯島の津にて六浦の関米を取る。諸人の歎きこれ多し。諸国七道の木戸、これも、旅人のわずらい、ただこのことに在り。眼前のことなり。汝見ざるや否や。

愚人色を作して云わく、汝が智分をもって上人を謗じ奉り、その法を誹ること、謂れ無し。知って云うか、愚かにして云うか。おそろし、おそろし。

その時、居士笑って云わく、ああおろかなり、おろかなり。彼の宗の僻見をあらあら申すべし。そもそも教に

大小有り、宗に権実を分かてり。鹿苑施小の昔は化城の戸ぼそに導くといえども、鷲峰開顕の筵にはその得益さらにこれ無し。

その時、愚人茫然として居士に問うて云わく、文証・現証実にもってしかなり。さて、いかなる法を持ってか生死を離れ速やかに成仏せんや。

居士示して云わく、我在俗の身なれども、深く仏道を修行して、幼少より多くの人師の語を聞き、ほぼ経教をも開き見るに、末代我らがごとくなる無悪不造のために

は、念仏往生の教えにしくはなし。されば、恵心僧都は「夫れ、往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり」と云い、法然上人は諸経の要文を集めて一向専修の念仏を弘め給う。中にも、弥陀の本願は諸仏超過の崇重なり。始め無三悪趣の願より終わり得三法忍の願に至るまで、いずれも悲願めでたけれども、第十八の願、殊に我らがために殊勝なり。また十悪・五逆をもきらわず、一念・多念をもえらばず。されば、上一人より下万民に至るまで、この宗をもてなし給うこと、他に異なり。また往生の人それいく

ばくぞや。

その時、愚人云わく、実に、小を恥じて大を慕い浅きを去って深きに就くは、仏教の理のみにあらず、世間にもこれ法なり。我早く彼の宗にうつらんと思う。委細に彼の旨を語り給え。彼の仏の悲願の中に「五逆・十悪をも簡ばず」と云える五逆とは何らぞや、十悪とはいかん。

智人の云わく、五逆とは、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、仏身より血を出だし、和合僧を破す、これを五逆と云うなり。十悪とは、身に三つ、口に四つ、意に三つなり。

身に三つとは殺・盗・婬、口に四つとは妄語・綺語・悪口・両舌、意に三つとは貪・瞋・癡、これを十悪と云うなり。愚人云わく、我、今解しぬ。今日よりは他力往生に憑みを懸くべきなり。

ここに愚人また云わく、もっての外盛んにいみじき密宗の行人あり。これも予が歎きを訪わんがために来臨して、始めには狂言・綺語のことわりを示し、終わりには顕密二宗の法門を談じて、予に問うて云わく、そもそも汝は、いかなる仏法をか修行し、いかなる経論をか読誦し奉

るや。予答えて云わく、我、一日、ある居士の教えによって、浄土の三部経を読み奉り、西方極楽の教主に憑みを深く懸くるなり。

行者云わく、仏教に二種有り。一には顕教、二には密教なり。顕教の極理は密教の初門にも及ばず云々。汝が執心の法を聞けば、釈迦の顕教なり。我が持つところの法は、大日覚王の秘法なり。実に三界の火宅を恐れ寂光の宝台を願わば、すべからく顕教をすてて密教につくべし。

愚人驚いて云わく、我いまだ顕密二道ということを聞かず。いかなるを顕教と云い、いかなるを密教と云えるや。

行者云わく、予はこれ頑愚にして、あえて賢を存せず。しかりといえども、今、一・二の文を挙げて汝が矇昧を挑げん。顕教とは、舎利弗等の請いによって応身如来の説き給う諸教なり。密教とは、自受法楽のために、法身大日如来の金剛薩埵を所化として説き給うところの大日経等の三部なり。

愚人云わく、実にもってしかなり。先非をひるがえして、翻

賢き教えに付き奉らんと思うなり。

またここに、萍のごとく諸州を回り、蓬のごとく県々に転ずる非人の、それとも知らず来り、門の柱に寄り立って含笑み、語ることなし。あやしみをなしてこれを問うに、始めには云うことなし。後に強いて問いを立つる時、彼が云わく「月蒼々として風忙々たり」と。形質常に異に、言語また通ぜず。その至極を尋ぬれば、当世の禅法これなり。予、彼の人の有り様を見、その言語を聞いて仏道の良因を問う時、非人云わく、修多羅の教えは月をさす指、教網はこれ

言語にとどこおる妄事なり。我が心の本分におちつかんと出で立つ法は、その名を禅と云うなり。

愚人云わく、願わくは、我聞かんと思う。

非人云わく、実にその志深くば、壁に向かい坐禅して、本心の月を澄ましめよ。ここをもって、西天には二十八祖系乱れず、東土には六祖の相伝明白なり。汝これを悟らずして教網にかかる。不便、不便。「是心即仏、即心是仏」なれば、この身の外に、さらにいずくにか仏あらんや。

愚人この語を聞いてつくづくと諸法を観じ、閑かに義理を案じて云わく、仏教万差にして、理非明らめ難し。宜なるかな、常啼は東に請い、善財は南に求め、薬王は臂を焼き、楽法は皮を剝ぐ。善知識実に値い難し。あるいは教内と談じ、あるいは教外と云う。このことわりを思うに、いまだ淵底を究めず法水に臨む者は深淵の思いを懐き、人師を見る族は薄氷の心を成せり。ここをもって金言には、「法に依って人に依らざれ」と定め、また爪上の土の譬えあり。もし仏法の真偽をしる人あらば、尋ねて師とすべ

し。求めて崇むべし。

夫れ、人界に生を受くるを天上の糸にたとえ、仏法の視聴は浮き木の穴に類いせり。身を軽くして法を重くすべしと思うによって衆山に攀じ、歎きに引かれて諸寺を回る。足に任せて一つの巌窟に至るに、後には青山峨々として松風常楽我浄を奏し、前には碧水湯々として岸うつ波四徳波羅蜜を響かす。深谷に開敷せる花も中道実相の色を顕し、広野に綻ぶる梅も界如三千の薫りを添う。言語道断・心行所滅せり。謂いつべし、商山の四皓の所居

とも。また知らず、古仏経行の迹なるか。景雲朝に立ち、霊光夕べに現ず。ああ、心をもって計るべからず、詞をもって宣ぶべからず。予この砌に沈吟とさまよい、彷徨と立回たちもとおり、徙倚とたたずむ。この処に忽然として一りの聖人坐す。その行儀を拝すれば、法華読誦の声深く心肝に染みて、閑窓の戸ぼそを伺えば、玄義の牀に臂をくたす。

ここに聖人、予が求法の志を酌み知って詞を和らげ、予に問うて云わく、汝なにによって、この深山の窟に至れるや。

予答えて云わく、生をかろくして法をおもくする者なり。

聖人問うて云わく、その行法いかん。

予答えて云わく、本より我は、俗塵に交わっていまだ出離を弁えず。たまたま善知識に値って、始めには律、次には念仏・真言ならびに禅、これらを聞くといえども、いまだ真偽を弁えず。

聖人云わく、汝が詞を聞くに、実にもってしかなり。身をかろくして法をおもくするは先聖の教え、予が存するところなり。そもそも上は非想の雲の上、下は那落の底ま

でも、生を受けて死をまぬかるる者やはある。しかれば、外典のいやしきおしえにも「朝に紅顔有って世路に誇るとも、夕べには白骨となって郊原に朽ちぬ」と云えり。雲上に交わって、雲のびんずらあざやかに、雪のたもとをひるがえすとも、その楽しみをおもえば、夢の中の夢なり。山のふもと、蓬がもとはついの栖なり。玉の台、錦の帳も、後世の道にはなにかせん。小野小町・衣通姫が花の姿も無常の風にちり、樊噲・張良が武芸に達せしも獄卒の杖をかなしむ。されば、心ありし古人の云わく「あわれなり

生を受けて死をまぬかるる者 卑教 朝に紅顔有って世路に誇ると 夕べには白骨となって郊原に朽ちぬ 雲上 鬢 鮮 雪のたもとを 翻 思 夢の中の夢なり 蓬 終 栖 玉の台 錦の帳 何 小野小町 衣通姫 花の姿 樊噲 張良 獄卒の杖 心 古人

鳥べの山の夕煙おくる人とてとまるべきかは」。「末のつゆ本のしずくや世の中のおくれさきだつためしなるらん」。先亡後滅の理、始めて驚くべきにあらず。願うても願うべきは仏道、求めても求むべきは経教なり。そもそも、汝が云うところの法門をきけば、あるいは小乗、あるいは大乗、位の高下はしばらくこれを置く、還って悪道の業たるべし。

ここに、愚人、驚いて云わく、如来一代の聖教はいずれも衆生を利せんがためなり。始め七処八会の筵より終

わり跋提河の儀式まで、いずれか釈尊の所説ならざる。たとい一分の勝劣をば判ずとも、何ぞ悪道の因と云うべきや。

聖人云わく、如来一代の聖教に、権有り実有り、大有り小有り、また顕密二道相分かち、その品一つにあらず。すべからく、その大途を示して汝が迷いを悟らしめん。

夫れ、三界の教主・釈尊は、十九歳にして伽耶城を出で、檀特山に籠もって難行苦行し、三十成道の刻みに三惑頓に破し、無明の大夜ここに明けしかば、すべからく本願に任せて一乗妙法蓮華経を宣ぶべしといえども、

機縁万差にしてその機仏乗に堪えず。しかれば、四十余年に所被の機縁を調えて、後八箇年に至って出世の本懐たる妙法蓮華経を説き給えり。

しかれば、仏の御年七十二歳にして、序分の無量義経に説き定めて云わく「我は先に道場菩提樹の下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。仏眼をもって一切の諸法を観ずるに、宣説すべからず。所以はいかん。諸の衆生の性欲の不同なることを知れば、種々に法を説きき。種々に法

を説くことは、方便力をもってす。四十余年にはいまだ真実を顕さず」文。この文の意は、仏の御年三十にして寂滅道場菩提樹の下に坐して、仏眼をもって一切衆生の心根を御覧ずるに、衆生成仏の直道たる法華経をば説くべからず。ここをもって、空拳を挙げて嬰児をすかすがごとく、様々のたばかりをもって、四十余年が間はいまだ真実を顕さずと年紀をさして、青天に日輪の出で暗夜に満月のかかるがごとく説き定めさせ給えり。

この文を見て、何ぞ、同じ信心をもって、仏の虚事と説

かるる法華巳前の権教に執著して、めずらしからぬ三界の故宅に帰るべきや。されば、法華経の一の巻の方便品に云わく「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」文。この文の意は、前四十二年の経々、汝が語るところの念仏・真言・禅・律を正直に捨てよとなり。この文明白なる上、重ねていましめて、第二の巻の譬喩品に云わく「ただ楽って大乗経典を受持するのみにして、乃至、余経の一偈をも受けざれ」文。この文の意は、年紀かれこれ煩わし、詮ずるところ、法華経より自余の経をば一偈をも受く

べからずとなり。しかるに、八宗の異義蘭菊に、道俗形を異にすれども、一同に法華経をば崇むる由を云う。されば、これらの文をばいかが弁えたる。正直に捨てよと云って余経の一偈をも禁むるに、あるいは念仏、あるいは真言、あるいは禅、あるいは律、これ余経にあらずや。

今この妙法蓮華経とは、諸仏出世の本意、衆生成仏の直道なり。されば、釈尊は付嘱を宣べ、多宝は証明を遂げ、諸仏は舌相を梵天に付けて「皆これ真実なり」と宣べ給えり。この経は、一字も諸仏の本懐、一点も多生の助けな

り。一言一語も虚妄あるべからず。この経の禁めを用いざる者は、諸仏の舌をきり、賢聖をあざむく人にあらずや。その罪実に怖るべし。されば、二の巻に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん」文。この文の意は、もし人この経の一偈一句をも背かん人は、過去・現在・未来、三世十方の仏を殺さん罪と定む。経教の鏡をもって当世にあてみるに、法華経をそむかぬ人は実にもって有りがたし。

事の心を案ずるに、不信の人なお無間を免れず。いわ

んや、念仏の祖師・法然上人は、法華経をもって念仏に対して「抛てよ」と云々。五千・七千の経教に、いずれの処にか法華経を抛てよと云う文ありや。三昧発得の行者・生身の弥陀仏とあがむる善導和尚、五種の雑行を立てて、法華経をば「千の中に一りも無し」とて千人持つとも一人も仏になるべからずと立てたり。経文には、「もし法を聞くことあらば、一りとして成仏せざることなけん」と談じて、この経を聞けば、十界の依正、皆仏道を成ずと見えたり。ここをもって、五逆の調達は天王如来の記別

に予かり、非器・五障の竜女も南方に頓覚成道を唱う。いわんやまた、蛣蜣の六即を立てて機を漏らすことなし。善導の言と法華経の文と、実にもって天地雲泥せり。いずれに付くべきや。なかんずくその道理を思うに、諸仏・衆経の怨敵、聖僧・衆人の讐敵なり。経文のごとくならば、いかでか無間を免るべきや。

ここに愚人色を作して云わく、汝賤しき身をもってほしいままに莠言を吐く。悟って言うか、迷って言うか、理非弁え難し。　忝くも善導和尚は弥陀善逝の応化、あるいは

勢至菩薩の化身と云えり。法然上人もまたしかなり。善導の後身といえり。上古の先達たる上、行徳秀発し、解了底を極めたり。何ぞ悪道に堕ち給うと云うや。

聖人云わく、汝が言しかなり。予も仰いで信を取ること、かくのごとし。ただし、仏法はあながちに人の貴賤には依るべからず、ただ経文を先とすべし。身の賤しきをもって、その法を軽んずることなかれ。「有人楽生悪死。有人楽死悪生（人有って生を楽い死を悪む。人有って死を楽い生を悪む）」の十二字を唱えし毘摩大国の狐は、帝釈の師

と崇められ、「諸行無常」等の十六字を談ぜし鬼神は、雪山童子に貴まる。これ必ず狐と鬼神との貴きにあらず。ただ法を重んずる故なり。

されば、我らが慈父・教主釈尊、双林最後の御遺言・涅槃経の第六には、「法に依って人に依らざれ」とて、普賢・文殊等の等覚已還の大薩埵、法門を説き給うとも、経文を手に把らずば用いざれとなり。天台大師云わく「修多羅と合わば、録してこれを用いる。文無く義無ければ信受すべからず」文。釈の意は、経文に明らかならんを用いよ、文証

無からんをば捨てよとなり。伝教大師云わく「仏説に依憑せよ。口伝を信ずることなかれ」文。前の釈と同意なり。竜樹菩薩云わく「修多羅に依るは白論なり。修多羅に依らざるは黒論なり」文。意は、経の中にも法華已前の権教をすててこの経につけよとなり。経文にも論文にも、法華に対して諸余の経典を捨てよと云うこと分明なり。しかるに、開元の録に挙ぐるところの五千・七千の経巻に、「法華経を捨てよ、乃至抛てよ」と嫌うことも、また雑行に摂めて「これを捨てよ」と云う経文も全く無し。されば、慥か

の経文を勘え出だして、善導・法然の無間の苦を救わるべし。

今の世の念仏の行者、俗男・俗女、経文に違するのみならず、また師の教えにも背けり。

五種の雑行とて念仏申さん人のすつべき日記、善導の釈これ有り。その雑行とは、選択に云わく「第一に読誦雑行とは、上の観経等の往生浄土の経を除いてより已外、大小乗・顕密の諸経において受持・読誦するを、ことごとく読誦雑行と名づく乃至第三に礼拝雑行とは、

上の弥陀を礼拝するを除いてより已外、一切の諸余の仏菩薩等および諸の世天において礼拝・恭敬するを、ことごとく礼拝雑行と名づく。第四に称名雑行とは、上の弥陀の名号を称うるを除いてより已外、自余の一切の仏菩薩等および諸の世天等の名号を称うるを、ことごとく称名雑行と名づく。第五に讃歎供養雑行とは、上の弥陀仏を除いてより已外、一切の諸余の仏菩薩等および諸の世天等において讃歎・供養するを、ことごとく讃歎供養雑行と名づく」文。

この釈の意は、第一の読誦雑行とは、念仏申さん道俗・男女、読むべき経あり、読むまじき経ありと定めたり。読むまじき経は、法華経・仁王経・薬師経・大集経・般若心経・転女成仏経・北斗寿命経、ことさらうち任せて諸人読まるる八巻の中の観音経、これらの諸経を一句一偈も読むならば、たとい念仏を志す行者なりとも、雑行に摂められて往生すべからず云々。予、愚眼をもって世を見るに、たとい念仏申す人なれども、この経々を読む人は、多く師弟敵対して七逆罪と成りぬ。

また第三の礼拝雑行とは、念仏の行者は弥陀三尊より外は、上に挙ぐるところの諸仏菩薩・諸天善神を礼するをば、礼拝雑行と名づけ、またこれを禁ず。しかるを、日本は神国として伊弉諾・伊弉冉の尊この国を作り、天照太神垂迹し御坐しまして、御裳濯河の流れ久しくして今にたえず。あに、この国に生を受けてこの邪義を用ゆべきや。また普天の下に生まれて三光の恩を蒙りながら、誠に日月・星宿を破すること、もっとも恐れ有り。

また第四の称名雑行とは、念仏申さん人は、唱うべき

仏菩薩の名あり、唱うまじき仏菩薩の名あり。唱うべき仏菩薩の名とは、弥陀三尊の名号、唱うまじき仏菩薩の名号とは、釈迦・薬師・大日等の諸仏、地蔵・普賢・文殊・日月星、二所と三島と熊野と羽黒と天照太神と八幡大菩薩と、これらの名を一遍も唱えん人は、念仏を十万遍・百万遍申したりとも、この仏菩薩・日月神等の名を唱うる過によって、無間にはおつとも、往生すべからずと云々。我世間を見るに、念仏を申す人も、これらの諸仏菩薩・諸天善神の名を唱うる故に、これまた師の教えに背けり。

第五の讃歎供養雑行とは、念仏申さん人は、供養すべき仏は弥陀三尊を供養せん外は、上に挙ぐるところの仏菩薩・諸天善神に香華のすこしをも供養せん人は、念仏の功は貴けれどもこの過によって雑行に摂すとこれをきらう。しかるに、世を見るに、社壇に詣でては幣帛を捧げ、堂舎に臨んでは礼拝を致す。これまた師の教えに背けり。汝もし不審ならば、選択を見よ。その文明白なり。

また善導和尚、観念法門経に云わく「酒肉五辛、誓って発願して手に捉らざれ、口に喫まざれ。もしこの語に違せ

ば、即ち身・口ともに悪瘡を着けんと願ぜよ」文。この文の意は、念仏申さん男・女・尼・法師は、酒を飲まざれ、魚鳥を食わざれ、その外にら・ひる等の五つのからくくさき物を食わざれ、これを持たざる念仏者は、今生には悪瘡身に出で、後生には無間に堕つべしと云々。しかるに、念仏申す男・女・尼・法師、この誡めをかえりみず、ほしいままに酒をのみ、魚鳥を食らうこと、剣を飲む譬えにあらずや。

ここに愚人云わく、誠にこれこの法門を聞くに、念仏の

法門実に往生すといえども、その行儀、修行し難し。いわんや、彼の憑むところの経論は、皆もって権説なり。往生すべからざるの条、分明なり。ただし、真言を破することは、その謂れ無し。夫れ、大日経とは大日覚王の秘法なり。大日如来より系も乱れず善無畏・不空これを伝え、弘法大師は日本に両界の曼陀羅を弘め、尊高三十七尊、秘奥なるものなり。しかるに、顕教の極理は、なお密教の初門にも及ばず。ここをもって、後唐院は「法華すらなお及ばず。いわんや自余の教えをや」と釈し給えり。このこと、

いかんが心得うべきや。

聖人示して云わく、予も始めは大日に憑みを懸けて密宗に志を寄す。しかれども、彼の宗の最底を見るに、その立義もまた謗法なり。汝が云うところの高野の大師は、嵯峨天皇の御宇の人師なり。しかるに、皇帝より仏法の浅深を判釈すべき由の宣旨を給わって、十住心論十巻これを造る。この書広博なるあいだ、要を取って三巻にこれを縮め、その名を秘蔵宝鑰と号す。始め異生羝羊心より終わり秘密荘厳心に至るまで十に分別し、第八法華・第九華厳・第十

真言と立てて、「法華は華厳にも劣れば、大日経には三重の劣」と判じて、「かくのごとき乗々は、自乗に仏の名を得れども、後に望めば戯論と作る」と書いて、法華経を「狂言・綺語」と云い、釈尊をば「無明に迷える仏」と下せり。よって、伝法院を建立せし弘法の弟子・正覚房は「法華経は大日経のはきものとりに及ばず、釈迦仏は大日如来の牛飼いにも足らず」と書けり。

汝、心を静めて聞け。一代の五千・七千の経教、外典三千余巻にも、「法華経は戯論、三重の劣、華厳経にも劣り、

釈尊は無明に迷える仏にて大日如来の牛飼いにも足らず」と云う慥かなる文ありや。たといさる文有りというとも、能く能く思案あるべきか。

経教は西天より東土に泊ぼす時、訳者の意楽に随って経論の文不定なり。さて後秦の羅什三蔵は、「我漢土の仏法を見るに、多く梵本に違せり。我が訳するところの経、もし誤りなくば、我死して後、身は不浄なれば焼くるというとも、舌ばかりは焼けざらん」と常に説法し給いしに、焼き奉る時、御身は皆骨となるといえども、御舌ばかりは

青蓮華の上に光明を放って日輪を映奪し給いき。有り難きことなり。さてこそ、ことさら彼の三蔵の訳するところの法華経は、唐土にやすやすと弘まらせ給いしか。しかれば、延暦寺の根本大師、諸宗を責め給いしには、「法華を訳する三蔵は舌の焼けざる験あり。汝等が依経は皆誤れり」と破し給うはこれなり。涅槃経にも「我が仏法は他国へ移らん時、誤り多かるべし」と説き給えば、経文にたとい「法華経はいたずらごと」、釈尊をば「無明に迷える仏なり」とありとも、権教・実教、大乗・小乗、説時の前後、

訳者、能く能く尋ぬべし。いわゆる、老子・孔子は九思一言・三思一言、周公旦は食するに三度吐き沐するに三度にぎる。外典のあさき、なおかくのごとし。いわんや、内典の深義を習わん人をや。その上、この義、経論に迹形もなし。「人を毀り、法を謗じては、悪道に堕つべし」とは、弘法大師の釈なり。必ず地獄に堕ちんこと、疑いなきものなり。

ここに愚人、茫然とほれ、忽然となげいて、やや久しゅうして云わく、この大師は内外の明鏡、衆人の導師たり。徳行世に勝れ、名誉あまねく聞こえて、あるいは唐土より

三鈷を八万余里の海上をなぐるに即ち日本に至り、あるいは心経の旨をつづるに蘇生の族途に彳む。しかれば、この人ただ人にあらず、大聖権化の垂迹なり。仰いで信を取らんにはしかじ。

聖人云わく、予も始めはしかなり。ただし、仏道に入って理非を勘え見るに、仏法の邪正は必ず得通自在にはよらず。ここをもって、仏は「法に依って人に依らざれ」と定め給えり。前に示すがごとし。彼の阿伽陀仙は恒河を片耳にたたえて十二年、耆**瓮**仙は一日の中に大海をすいほす。

張階は霧を吐き、欒巴は雲を吐く。しかれども、いまだ仏法の是非を知らず、因果の道理をも弁えず。異朝の法雲法師は講経勤修の砌に須臾に天華をふらせしかども、妙楽大師は、「感応かくのごときも、なお理に称わず」とて、いまだ仏法をばしらずと破し給う。

夫れ、この法華経と申すは、已今当の三説を嫌って、已前の経をば「いまだ真実を顕さず」と打ち破り、肩を並ぶる経をば「今説」の文をもってせめ、已後の経をば「当説」の文をもって破る。実に三説第一の経なり。

第四の巻に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説くところの経典、しかもこの経の中において、法華は最も第一なり」文。この文の意は、霊山会上に薬王菩薩と申せし菩薩に仏告げて云わく、始め華厳より終わり涅槃経に至るまで、無量無辺の経、恒河沙等の数多し。その中には今の法華経最第一と説かれたり。しかるを、弘法大師は一の字を三と読まれたり。同巻に云わく「我は仏道のために、無量の土において、始めより今に至るまで、広く諸経を説く。しかもその中において、この経は第一なり」。この文の意

は、また釈尊無量の国土にして、あるいは名字を替え、あるいは年紀を不同になし、種々の形を現して説くところの諸経の中には、この法華経を第一と定められたり。同じき第五の巻には「最もその上に在り」と宣べて、大日経・金剛頂経等の無量の経の頂にこの経は有るべしと説かれたるを、弘法大師は「最もその下に在り」と謂えり。釈尊と弘法と、法華経と宝鑰とは、実にもって相違せり。釈尊を捨て奉って弘法に付くべきか、また弘法を捨てて釈尊に付き奉るべきか。また経文に背いて人師の

言に随うべきか、人師の言を捨てて金言を仰ぐべきか、用捨心に有るべし。

また第七の巻の薬王品に十喩を挙げて教えを歎ずるに、第一は水の譬えなり。江河を諸経に譬え、大海を法華に譬えたり。しかるを、「大日経は勝れたり、法華は劣れり」と云う人は、即ち「大海は小河よりもすくなし」と云わん人なり。しかるに、今の世の人は、海の諸河に勝ることをば知るといえども、法華経の第一なることをば弁えず。第二は山の譬えなり。衆山を諸経に譬え、須弥山を法華に

譬えたり。須弥山は上下十六万八千由旬の山なり。いずれの山か肩を並ぶべき。法華経を「大日経に劣る」と云う人は、「富士山は須弥山より大なり」と云わん人なり。第三は星月の譬えなり。諸経を星に譬え、法華経を月に譬う。月と星とはいずれ勝りたりと思えるや。乃至、次下には、「この経もまたかくのごとく、一切の如来の所説、もしは菩薩の所説、もしは声聞の所説、諸の経法の中に、最もこれ第一なり」とて、この法華経はただ釈尊一代の第一と説き給うのみにあらず、大日および薬師・阿弥陀等の諸仏、普

賢・文殊等の菩薩の一切の説くところの諸経の中に、この法華経第一と説けり。されば、もしこの経に勝りたりと云う経有らば、外道・天魔の説と知るべきなり。

その上、大日如来というは、久遠実成の教主釈尊、四十二年和光同塵してその機に応ずる時、三身即一の如来しばらく毘盧遮那と示せり。この故に、開顕実相の前には、釈迦の応化と見えたり。ここをもって普賢経には「釈迦牟尼仏は、毘盧遮那遍一切処と名づけたてまつる。その仏の住処は、常寂光と名づく」と説けり。今、法華経は、十界

互具・一念三千・三諦即是・四土不二と談ず。その上に一代聖教の骨髄たる二乗作仏・久遠実成は今経に限れり。汝語るところの大日経・金剛頂経等の三部の秘経にこれらの大事ありや。善無畏・不空等、これらの大事の法門を盗み取って、己が経の眼目とせり。本経・本論には迹形もなき誑惑なり。急ぎ急ぎこれを改むべし。

そもそも大日経とは、四教含蔵して尽形寿戒等を明かせり。唐土の人師は天台所立の第三時・方等部の経なりと定めたる権教なり。あさまし、あさまし。汝、実に道心

あらば、急いで先非を悔ゆべし。夫れ以んみれば、この妙法蓮華経は一代の観門を一念にすべ、十界の依正を三千につづめたり。縮

聖愚問答抄下

ここに愚人いささか和らいで云わく、経文は明鏡なり、疑慮をいたすに及ばず。ただし、法華経は三説に秀で一代に

超ゆるといえども、言説に拘らず経文に留まらざる我らが心の本分の禅の一法にはしくべからず。およそ万法を払遣して言語の及ばざるところを、禅法とは名づけたり。

されば、跋提河の辺、沙羅林の下にして、釈尊、金棺より御足を出だし拈華微笑して、この法門を迦葉に付嘱ありしより已来、天竺二十八祖系乱れず、唐土には六祖次第に弘通せり。達磨は西天にしては二十八祖の終わり、東土にしては六祖の始めなり。相伝をうしなわず、教網に滞るべからず。ここをもって大梵天王問仏決疑経に云わく「吾に

正法眼蔵、涅槃の妙心、実相無相、微妙の法門有り。教外に別伝し、文字を立てず、摩訶迦葉に付嘱す」とて、迦葉にこの禅の一法をば教外に伝うと見えたり。

すべて修多羅の経教は月をさす指、月を見て後は指何かはせん。心の本分、禅の一理を知って後は、仏教に心を留むべしや。されば古人云わく「十二部経はすべてこれ閑文字」と云々。よって、この宗の六祖・慧能の壇経を披見するに、実にもってしかなり。言下に契会して後は、教は何かせん。この理いかんが弁えんや。

聖人示して云わく、汝まず法門を置いて道理を案ぜよ。そもそも、我、一代の大途を伺わず十宗の淵底を究めずして、国を諫め人を教うべきか。汝が談ずるところの禅は、我最前に習い極めてその至極を見るに、はなはだもって僻事なり。禅に三種あり。いわゆる、如来禅と教禅と祖師禅となり。汝が言うところの祖師禅等の一端、これを示さん。聞いてその旨を知れ。

もし教を離れてこれを伝うといわば、教を離れて理無く、理を離れて教無し。理全く教、教全く理という道理、

汝これを知らざるや。「拈華微笑して、迦葉に付嘱し給う」というも、これ教なり。「不立文字」という四字も、即ち教なり、文字なり。このこと、和漢両国に事旧りぬ。今いえば事新しきに似たれども、一・両の文を勘えて汝が迷いを払わしめん。

補註十一に云わく「また、もし言説に滞ると謂わば、しばらく娑婆世界には、将に何をもって仏事となさんや。禅徒あに言説もて人に示さざらんや。文字を離れて解脱の義を談ずることなし。あに聞かざらんや」。乃至、次下に云わ

く「あに達磨西より来って『直ちに人心を指し見性して成仏す』というに、しかも華厳等の諸大乗経にこのことを無からんや。ああ、世人、何ぞそれ愚かなるや。汝等当に仏の所説を信ずべし。諸仏如来は言に虚妄無し」。

この文の意は、もし教文にとどこおり言説にかかわるとて教の外に修行すといわば、この娑婆国にはさていかんがして仏事・善根を作すべき。さように云うところの禅人も、人に教うる時は言をもって云わざるべしや。その上、仏道の解了を云う時、文字を離れて義なし。また達磨西よ

り来って直ちに人心を指して仏なりと云う。これ程の理は、華厳・大集・大般若等の法華已前の権大乗経にも在々処々にこれを談ぜり。これをいみじきこととせんは、無下に云うかいなきことなり。ああ、今の世の人、何ぞはなはだ僻ひがめるや。ただ中道実相の理に契当せる妙覚果満の如来の誠諦の言を信ずべきなり。

また妙楽大師、弘決の一に、この理を釈して云わく「世人、教を蔑ろにして理観を尚ぶは、誤れるかな、誤れるかな」と。この文の意は、今の世の人々は、観心・

観法を先として経教を尋ね学ばず、還って教をあなずり経をかろしむる、これ誤れりと云う文なり。

その上、当世の禅人、自宗に迷えり。続高僧伝を披見するに、習禅の初祖・達磨大師の伝に云わく「教に藉って宗を悟る」。如来一代の聖教の道理を習学し、法門の旨、宗々の沙汰を知るべきなり。また達磨の弟子、六祖の第二祖・慧可の伝に云わく「達磨禅師、四巻の楞伽をもって可に授けて云わく『我、漢の地を観るに、ただこの経のみ有り。仁者、依行せば、自ずから世を度することを得ん』と」。こ

の文の意は、達磨大師天竺より唐土に来って、四巻の楞伽経をもって慧可に授けて云わく「我この国を見るに、この経殊に勝れたり。汝持ち修行して仏に成れ」となり。

これらの祖師、既に経文を前とす。もしこれによって経に依ると云わば、大乗か小乗か、権教か実教か、能く能く弁うべし。あるいは経を用いるには、禅宗も楞伽経・首楞厳経・金剛般若経等による。これ皆法華已前の権教、覆蔵の説なり。ただ諸経に「是心即仏、即心是仏」

等の理の方を説ける一・両の文と句とに迷って、大小、権実、顕露・覆蔵をも尋ねず、ただ不二を立てて而二を知らず、「己仏に均しと謂う」の大慢を成せり。彼の月氏の大慢が迹をつぎ、この尸那の三階禅師が古風を追う。しかりといえども、大慢は生きながら無間に入り、三階は死して大蛇と成りぬ。おそろし、おそろし。

釈尊は、三世了達の解了朗らかに、妙覚果満の智月潔くして、未来を鑑みたまい、像法決疑経に記して云わく「諸の悪比丘、あるいは禅を修すること有るも、経論に

依らず。自ら己見を逐って、非をもって是となし、これ邪なりこれ正なりと分別すること能わず。あまねく道俗に向かって、かくのごとき言を作さん。『我能くこれを知り、我能くこれを見る』と。当に知るべし、この人は速やかに我が法を滅せん」。この文の意は、諸の悪比丘有って、禅を信仰して経論をも尋ねず、邪見を本として法門の是非をば弁えずして、しかも男・女・尼・法師等に向かって「我よく法門を知れり。人はしらず」と云って、この禅を弘むべし。当に知るべし、この人は我が正法を滅すべしとなり。

この文をもって当世を見るに、あたかも符契のごとし。汝慎むべし、汝畏るべし。

先に談ずるところの、天竺に二十八祖有ってこの法門を口伝すということ、その証拠いずれに出でたるや。仏法を相伝する人、二十四人あるいは二十三人と見えたり。しかるを、二十八祖と立つること、出だすところの翻訳いずれにかある。全く見えざるところなり。この付法蔵の人のこと、私に書くべきにあらず。如来の記文、分明なり。

その付法蔵伝に云わく「また比丘有り、名づけて師子と曰

う。罽賓国において大いに仏事を作す。時に彼の国王をば弥羅掘と名づけ、邪見熾盛にして心に敬信無く、罽賓国において塔寺を毀壊し、衆僧を殺害す。即ち利剣をもって、もって師子を斬る。頸の中に血無く、ただ乳のみ流れ出ず。法を相付する人、ここにおいて便ち絶えん」。この文の意は、仏、我が入涅槃の後に我が法を相伝する人二十四人あるべし。その中に最後弘通の人に当たるをば師子比丘と云わん。罽賓国という国にて我が法を弘むべし。彼の国の王をば檀弥羅王と云うべし。邪見放逸にして、仏法を信ぜず、衆

僧を敬わず、堂塔を破り失い、剣をもって諸僧の頸を切るべし。即ち師子比丘の頸をきらん時に、頸の中に血無く、ただ乳のみ出ずべし。この時に仏法を相伝せん人絶ゆべしと定められたり。案のごとく、仏の御言違わず、師子尊者頸をきられ給うこと、実にもってしかなり。王のかいな、共につれて落ち畢わんぬ。

二十八祖を立つること、はなはだもって僻見なり。禅の僻事、これより興るなるべし。今、慧能が壇経に二十八祖を立つることは、達磨を高祖と定むる時、師子と達磨との年

紀遥かなるあいだ、三人の禅師を私に作り入れて、「天竺より来れる付法蔵、系乱れず」と云って、人に重んぜさせんための僻事なり。このこと異朝にして事旧りぬ。補註の十一に云わく「今家は二十三祖を承用す。あに誤り有らんや。もし二十八祖を立つるは、いまだ出だすところの翻訳を見ざるなり。近来さらに石に刻み、版に鏤め、七仏・二十八祖を図状し、各一偈をもって伝授相付すること有り。ああ、仮託何ぞそれ甚だしきや。識者力有らば、よろしくこの弊を革むべし」。これも、二十八祖を立て、石に

刻きざみ、版鏤にちりばめて伝うること、はなはだもって誤れり、このことを知る人あらば、この誤りをあらためなおせとなり。

祖師禅、はなはだ僻事なること、ここにあり。先に引くところの大梵天王問仏決疑経の文を、教外別伝の証拠に汝これを引く。既に自語相違せり。その上、この経は説相権教なり。また開元・貞元の再度の目録にも全く載せず。これ録外の経なる上、権教と見えたり。しかれば、世間の学者用いざるところなり。証拠とするにたらず。

そもそも、今の法華経を説かるる時益をうる輩、迹門界如三千の時、敗種の二乗、仏種を萌す。四十二年の間は「永く成仏せず」と嫌われて、在々処々の集会にして罵詈・誹謗の音をのみ聞き、人天大会に思いうとまれて既に飢え死ぬべかりし人々も、今の経に来って、舎利弗は華光如来、目連は多摩羅跋栴檀香如来、阿難は山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七宝華如来、五百の羅漢は普明如来、二千の声聞は宝相如来の記別に予かる。顕本遠寿の日は、微塵数の菩薩、道を増し生を損じて、位大覚に隣る。されば、天台

大師の釈を披見するに、他経には、菩薩は仏になると云って二乗の得道は永くこれ無し。善人は仏になると云って悪人の成仏を明かさず。男子は仏になると説いて女人は地獄の使いと定む。人天は仏になると云って畜類は仏になるといわず。しかるを、今経はこれらが皆仏になると説く。たのもしきかな。

末代濁世に生を受くといえども、提婆がごとくに五逆をも造らず、三逆をも犯さず。しかるに、提婆なお天王如来の記別を得たり。いわんや、犯さざる我らが身をや。八歳の

竜女、既に蛇身を改めずして南方に妙果を証す。いわんや、人界に生を受けたる女人をや。ただ得難きは人身、値い難きは正法なり。汝、早く邪を翻して正に付き、凡を転じて聖を証せんと思わば、念仏・真言・禅・律を捨て、この一乗妙典を受持すべし。もししからば、妄染の塵穢を払って清浄の覚体を証せんこと疑いなかるべし。

ここに愚人云わく、今、聖人の教誡を聴聞するに、日来の曚昧たちまちに開けぬ。天真発明とも云いつべし。理非顕然なれば、誰か信仰せざらんや。ただし、世上を見るに、

上一人より下万民に至るまで、念仏・真言・禅・律を深く信受し御坐します。さる前には、国土に生を受けながら、いかでか王命を背かんや。その上、我が親といい、祖といい、かたがた念仏等の法理を信じて、他界の雲に交わり畢わんぬ。

また日本には上下の人数いくばくか有る。しかりといえども、権教・権宗の者は多く、この法門を信ずる人はいまだその名をも聞かず。よって、善処・悪処をいわず、邪法・正法を簡ばず、内典五千・七千の多きも外典三千余巻の広

きも、ただ主君の命に随い父母の義に叶うが肝心なり。さ
れば、教主釈尊は天竺にして孝養・報恩の理を説き、孔子
は大唐にして忠功・孝高の道を示す。師の恩を報ずる人は、
肉をさき身をなぐ。主の恩をしる人は、弘演は腹をさき、
予譲は剣をのむ。親の恩を思いし人は、丁蘭は木をきざみ、
伯瑜は杖になく。儒・外・内、道は異なりといえども、報恩
謝徳の教えは替わることなし。しかれば、主・師・親のい
まだ信ぜざる法理を我始めて信ぜんこと、既に違背の過に
沈みなん。法門の道理は、経文明白なれば、疑網すべて尽

きぬ。後生を願わずば、来世苦に沈むべし。進退これ谷まれり。我いかんがせんや。

聖人云わく、汝この理を知りながら、なおこの語をなす。理の通ぜざるか、意の及ばざるか。我、釈尊の遺法をまなび仏法に肩を入れしより已来、知恩をもって最とし、報恩をもって前とす。世に四恩あり。これを知るを人倫となづけ、知らざるを畜生とす。予、父母の後世を助け国家の恩徳を報ぜんと思うが故に身命を捨つること、あえて他事にあらず、ただ知恩を旨とするばかりなり。

まず、汝、目をふさぎ心を静めて道理を思え。我は善道を知りながら、親と主との悪道にかからんを諫めざらんや。また愚人狂い酔って毒を服せんを我知りながら、これをいましめざらんや。そのごとく法門の道理を存じて火血刀の苦を知りながら、いかでか恩を蒙る人の悪道におちんことを歎かざらんや。身をもなげ、命をも捨つべし。諫めてもあきたらず、歎きても限りなし。今生に眼を合わする苦しみ、なおこれを悲しむ。いわんや、悠々たる冥途の悲しみ、あに痛まざらんや。恐れても恐るべきは後世、慎んで

も慎むべきは来世なり。しかるを、是非を論ぜず親の命に随い、邪正を簡ばず主の仰せに順わんと云うこと、愚癡の前には忠・孝に似たれども、賢人の意には不忠・不孝これに過ぐべからず。

されば、教主釈尊は、転輪聖王の末、師子頰王の孫、浄飯王の嫡子として五天竺の大王たるべしといえども、生死無常の理をさとり、出離解脱の道を願って世を厭い給いしかば、浄飯大王これを歎き、四方に四季の色を顕して太子の御意を留め奉らんと巧み給う。まず東には、霞

棚引　絶間　雁　越え　路　かえ　まど　うめ

たなびくたえまよりかりがねこしじに帰り、窓の梅の

かぎよくれん　うち　通　嫋　々　はな　いろ　百　囀

香玉簾の中にかよい、じようじようたる花の色、ももさえず

うぐいす　はる　けしき　あらわ　みなみ　いずみ　いろしろ　妙

りの鶯、春の気色を顕せり。南には、泉の色白たえに

たまがわ　う　はな　しのだ　もり　時　鳥　なつ

して、かの玉川の卯の華、信太の森のほととぎす、夏のす

あらわ　にし　もみじとこは　まじ　にしき

がたを顕せり。西には、紅葉常葉に交わればさながら錦を

織　まじ　おぎ吹　かぜしず　まつ　あらし　物　凄　す

おり交え、荻ふく風閑かにして松の嵐ものすごし。過ぎに

なつ　名　残　さわべ　ほたる　ひかり　天　そら　ほし

し夏のなごりには、沢辺にみゆる蛍の光あまつ空なる星

あやま　まつむし　すずむし　こえごえなみだ　もよお　きた　か

かと誤り、松虫・鈴虫の声々涙を催せり。北には、枯れ

の　いろ　物　憂　いけ　みぎわ　氷　柱　居　たに　おがわ

野の色いつしかものうく、池の汀につらいて、谷の小川

音寂

もおとさびぬ。

有様

かかるありさまを造って御意をなぐさめ給うのみならず、四門に五百人ずつの兵を置いて守護し給いしかども、終に太子の御年十九と申せし二月八日の夜半の比、車匿を召して金泥駒に鞍置かせ、伽耶城を出でて檀特山に入り、十二年、高山に薪をとり深谷に水を結んで難行苦行し給い、三十成道の妙果を感得して、三界の独尊、一代の教主と成って、父母を救い群生を導き給いしをば、さて不孝の人と申すべきか。仏を不孝の人と云いしは、九十五種の

外道なり。父母の命に背いて無為に入り、還って父母を導くは、孝の手本なること、仏その証拠なるべし。

彼の浄蔵・浄眼は、父の妙荘厳王、外道の法に著して仏法に背き給いしかども、二人の太子は父の命に背いて雲雷音王仏の御弟子となり、終に父を導いて沙羅樹王仏と申す仏になし申されけるは、不孝の人と云うべきか。経文には「恩を棄てて無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり」と説いて、今生の恩愛をば皆すてて仏法の実の道に入る、これ実に恩をしれる人なりと見えたり。

また、主君の恩の深きこと、汝よりも能くしれり。汝もし知恩の望みあらば、深く諫め、強いて奏せよ。非道にも主命に随わんということ、佞臣の至り、不忠の極まりなり。殷の紂王は悪王、比干は忠臣なり。政事理に違いしを見て強いて諫めしかば、即ち比干は胸を割かる。紂王は比干死して後、周の王に打たれぬ。今の世までも比干は忠臣といわれ、紂王は悪王といわる。夏の桀王を諫めし竜逄は頭をきられぬ。されども、桀王は悪王、竜逄は忠臣とぞ云う。「主君を三度諫むるに用いずば山林に交われ」とこ

そ教えたれ。何ぞその非を見ながら黙せんと云うや。

古の賢人、世を遁れて山林に交わりし先蹤を集めて、いささか汝が愚耳に聞かしめん。殷の代の太公望は磻溪という谷に隠る。周の代の伯夷・叔斉は首陽山という山に籠もる。秦の綺里季は商洛山に入り、漢の厳光は孤亭に居し、晋の介子綏は綿上山に隠れぬ。これらをば不忠と云うべきか。愚かなり。汝、忠を存せば諫むべし。孝を思わば言うべきなり。

まず、汝「権教・権宗の人は多く、この宗の人は少な

し。何ぞ多を捨てて少に付く」と云うこと、必ず多きが尊くして少なきが卑しきにあらず。賢善の人は希に、愚悪の者は多し。麒麟・鸞鳳は禽獣の奇秀なり。しかれども、これははなはだ少なし。牛羊・烏鴿は畜鳥の拙卑なり。されども、これは転た多し。必ず多きがたっとくして少なきがいやしくば、麒麟をすてて牛羊をとり、鸞鳳を閣いて烏鴿をとるべきか。摩尼・金剛は金石の霊異なり。この宝は乏しく、瓦礫・土石は徒物の至り、これはまた巨多なり。汝が言のごとくならば、玉なんどをば捨てて瓦礫を用ゆべき

か。はかなし、はかなし。聖君は希にして千年に一たび出で、賢佐は五百年に一たび顕る。摩尼は空しく名のみ聞く。麟鳳誰か実を見たるや。世間・出世、善き者は乏しく、悪しき者は多きこと眼前なり。しかれば、何ぞあながちに少なきをおろかにして多きを詮とするや。土沙は多けれども、米穀は希なり。木皮は充満すれども、布絹は些少なり。汝ただ正理をもって前とすべし。別して人の多きをもって本とすることなかれ。

ここに、愚人、席をさり袂をかいつくろいて云わく、誠

に聖教の理をきくに、人身は得難く、天上の糸筋の海底の針に貫けるよりも希に、仏法は聞き難くして、一眼の亀の浮き木に遇うよりも難し。今既に、得難き人界に生をうけ、値い難き仏教を見聞しつ。今生をもだしては、またいずれの世にか生死を離れ菩提を証すべき。夫れ、一劫受生の骨は山よりも高けれども、仏法のためにはいまだ一骨をもすてず。多生恩愛の涙は海よりも深けれども、なお後世のためには一滴をも落とさず。拙きが中に拙く、愚かなるが中に愚かなり。たとい命をすて身をやぶるとも、

生を軽くして仏道に入り、父母の菩提を資け、愚身が獄縛をも免るべし。能く能く教えを示し給え。

そもそも、法華経を信ずるその行相いかん。五種の行の中には、まずいずれの行をか修すべき。丁寧に尊教を聞かんことを願う。

聖人示して云わく、汝、蘭室の友に交わって麻畝の性と成る。誠に禿樹、禿にあらず、春に遇って栄え花さく。枯れ草、枯るるにあらず、夏に入って鮮やかに注う。もし先非を悔いて正理に入らば、湛寂の潭に遊泳して無為の宮

に優遊せんこと、疑いなかるべし。

そもそも、仏法を弘通し群生を利益せんには、まず教・機・時・国・教法流布の前後を弁うべきものなり。所以は、時に正・像・末あり、法に大・小乗あり、修行に摂・折あり。摂受の時、折伏を行ずるも非なり。折伏の時、摂受を行ずるも失なり。しかるに、今の世は摂受の時か折伏の時か、まずこれを知るべし。摂受の行は、この国に法華一純に弘まりて邪法・邪師一人もなしといわん、この時は、山林に交わって観法を修し、五種六種乃至十種等を

行ずべきなり。折伏の時は、かくのごとくならず。経教のおきて蘭菊に、諸宗のおぎろ誉れを擅にし、邪正肩を並べ、大小先を争わん時は、万事を閣いて謗法を責むべし。これ折伏の修行なり。この旨を知らずして摂折途に違わば、得道は思いもよらず、悪道に堕つべしということ、法華・涅槃に定め置き、天台・妙楽の解釈にも分明なり。これ仏法修行の大事なるべし。

譬えば、文武両道をもって天下を治むるに、武を先とすべき時もあり、文を旨とすべき時もあり。天下無為にして

国土静かならん時は、文を先とすべし。東夷・南蛮・西戎・北狄、蜂起して野心をさしはさまんには、武を先とすべきなり。文武のよきことばかりを心えて時をもしらず、万邦安堵の思いをなして世間無為ならん時、甲冑をよろい兵杖をもたんことも非なり。また王敵起こらん時、戦場にして武具をば閣いて筆硯を提えんこと、これもまた時に相応せず。

摂受・折伏の法門もまたかくのごとし。正法のみ弘まって邪法・邪師無からん時は、深谷にも入り閑静にも居し

て、読誦・書写をもし、観念・工夫をも凝らすべし。これ天下の静かなる時筆硯を用いるがごとし。権宗・謗法、国にあらん時は、諸事を閣いて謗法を責むべし。これ合戦の場に兵杖を用ゆるがごとし。

しかれば、章安大師、涅槃の疏に釈して云わく「昔の時は平らかにして法弘まる。応に戒を持つべし。杖を持つことなかれ。今の時は嶮にして法翳くる。応に杖を持つべし。戒を持つことなかれ。今昔ともに嶮ならば、応にともに杖を持つべし。今昔ともに平らかならば、応にともに戒

を持つべし。取捨宜しきを得て、一向にすべからず」。この釈の意、分明なり。昔は世もすなおに人もただしくして、邪法・邪義無かりき。されば、威儀をただし、穏便に行業を積んで、杖をもって人を責めず、邪法をとがむること無かりき。今の世は濁世なり。人の情もひがみゆがんで権教・謗法のみ多ければ、正法弘まりがたし。この時は、読誦・書写の修行も観念・工夫・修練も無用なり。ただ折伏を行じて、力あらば威勢をもって謗法をくだき、また法門をもっても邪義を責めよとなり。取捨その旨を得て、一向に

執（しゅう）することなかれと書（か）けり。

今（いま）の世（よ）を見（み）るに、正法一純（しょうほういちじゅん）に弘（ひろ）まる国（くに）か、邪法（じゃほう）の興盛（こうじょう）する国（くに）か、勘（かんが）うべし。しかるを、浄土宗（じょうどしゅう）の法然（ほうねん）は、念仏（ねんぶつ）に対（たい）して法華経（ほけきょう）を捨閉閣抛（しゃへいかくほう）とよみ、善導（ぜんどう）は、法華経（ほけきょう）を雑行（ぞうぎょう）と名（な）づけ、あまつさえ千中無一（せんちゅうむいち）とて、千人信（せんにんしん）ずとも一人得道（いちにんとくどう）の者（もの）あるべからずと書（か）けり。真言宗（しんごんしゅう）の弘法（こうぼう）は、法華経（ほけきょう）を、華厳（けごん）にも劣（おと）り、大日経（だいにちきょう）には三重（さんじゅう）の劣（れつ）と書（か）き、戯論（けろん）の法（ほう）と定（さだ）めたり。正覚房（しょうがくぼう）は、法華経（ほけきょう）は大日経（だいにちきょう）のはきものとりにも及（およ）ばずと云（い）い、釈尊（しゃくそん）をば大日如来（だいにちにょらい）の牛飼（うしか）いにもたらずと判（はん）ぜり。

禅宗は、法華経を、吐きたるつばき、月をさす指、教網なんど下す。小乗律等は、法華経は邪教、天魔の所説と名づけたり。これらあに謗法にあらずや。責めてもなおあまりあり。禁めてもまたたらず。

愚人云わく、日本六十余州、人替わり法異なりといえども、あるいは念仏者、あるいは真言師、あるいは禅、あるいは律、誠に一人として謗法ならざる人はなし。しかりといえども、人の上沙汰してなにかせん。ただ我が心中に深く信受して、人の誤りをば余所のことにせんと思う。

聖人示して云わく、汝言うところ実にしかなり。我もその義を存せしところに、経文には、あるいは「身命を惜しまず」とも、あるいは「むしろ身命を喪うとも」とも説く。何故にかようには説かるるやと存ずるに、ただ人をはばからず経文のままに法理を弘通せば、謗法の者多から ん世には必ず三類の敵人有って命にも及ぶべしと見えたり。その仏法の違目を見ながら、我もせめず国主にも訴えずば、教えに背いて仏弟子にはあらずと説かれたり。

涅槃経第三に云わく「もし善比丘あって、法を壊る者を見

て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」。この文の意は、仏の正法を弘めん者、経教の義を悪しく説かんを聞き見ながら、我もせめず、我が身及ばずば国主に申し上げてもこれを対治せずば、仏法の中の敵なり。もし経文のごとくに、人をもはばからず、我もせめ国主にも申さん人は、仏弟子にして真の僧なりと説かれて候。

されば、「仏法の中の怨なり」の責めを免れんとて、か

ように諸人に悪まるれども、命を釈尊と法華経に奉り慈悲を一切衆生に与えて謗法を責むるを、心えぬ人は、口をすくめ眼を瞋らす。汝実に後世を恐れば、身を軽しめ、法を重んぜよ。ここをもって、章安大師云わく『『むしろ身命を喪うとも、教えを匿さず』とは、身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」。この文の意は、身命をばほろぼすとも正法をかくさざれ、その故は、身はかろく法はおもし、身をばころすとも法をば弘めよとなり。

悲しいかな、生者必滅の習いなれば、たとい長寿を得た

りとも、終には無常をのがるべからず。今世は、百年の内外の程を思えば、夢の中の夢なり。非想の八万歳、いまだ無常を免れず。忉利の一千年も、なお退没の風に破らる。いわんや、人間・閻浮の習いは、露よりもあやうく、芭蕉よりももろく、泡沫よりもあだなり。水中に宿る月のあるかなきかのごとく、草葉におく露のおくれさきだつ身なり。もしこの道理を得ば、後世を一大事とせよ。

歓喜仏の末の世の覚徳比丘、正法を弘めしに、無量の破戒、この行者を怨んで責めしかば、有徳国王、正法を守

る故に謗法を責めて、終に命終して阿閦仏の国に生まれて、彼の仏の第一の弟子となる。大乗を重んじて五百人の婆羅門の謗法を誡めし仙予国王は、不退の位に登る。憑もしいかな、正法の僧を重んじて邪悪の侶を誡むる人、かくのごとくの徳あり。されば、今の世に摂受を行ぜん人は、謗人とともに悪道に堕ちんこと疑いなし。南岳大師の四安楽行に云わく「もし菩薩有って、悪人を将護して治罰すること能わず乃至その人は命終して、諸の悪人とともに地獄に堕ちん」。この文の意は、もし仏法を行ずる人有

って、謗法の悪人を治罰せずして観念・思惟を専らにして、邪正・権実をも簡ばず、詐って慈悲の姿を現ぜん人は、諸の悪人とともに悪道に堕つべしという文なり。今、真言・念仏・禅・律の謗人をたださず、いつわって慈悲を現ずる人、この文のごとくなるべし。

ここに愚人、意を窃かにし、言を顕にして云わく、誠に君を諫めて家を正しくすること、先賢の教え、本文に明白なり。外典かくのごとし、内典これに違うべからず。悪を見ていましめず、謗を知ってせめずば、経文に背き、祖師に

違せん。その禁め殊に重し。今より信心を至すべし。ただし、この経を修行し奉らんこと叶いがたし。もしその最要あらば、証拠を聞かんと思う。

聖人示して云わく、今汝の道意を見るに、鄭重・慇懃なり。いわゆる、諸仏の誠諦得道の最要は、ただこれ妙法蓮華経の五字なり。檀王の宝位を退き、竜女が蛇身を改めしも、ただこの五字の致すところなり。夫れ以んみれば、今の経は受持の多少をば「一偈一句」と宣べ、修行の時刻をば「一念随喜」と定めたり。およそ八万法蔵の広き

も、一部八巻の多きも、ただこの五字を説かんためなり。霊山の雲の上、鷲峰の霞の中に、釈尊要を結び地涌付嘱を得ることありしも、法体は何事ぞ。ただこの要法に在り。天台・妙楽の六千張の疏の玉を連ぬるも、道邃・行満の数軸の釈の金を並ぶるも、しかしながら、この義趣を出でず。誠に生死を恐れ、涅槃を欣い、信心を運び、渇仰を至さば、遷滅無常は昨日の夢、菩提の覚悟は今日のうつつなるべし。ただ南無妙法蓮華経とだにも唱え奉らば、滅せぬ罪やあるべき、来らぬ福や有るべき。真実なり、甚深な

り。これを信受すべし。

愚人掌を合わせ、膝を折って云わく、貴命肝に染み、教訓意を動ぜり。しかりといえども、「上は能く下を兼ぬ」の理なれば、広きは狭きを括り、多きは少なきを兼ぬ。しかるところに五字は少なく、文言は多し。首題は狭く、八軸は広し。いかんぞ功徳斉等ならんや。

聖人云わく、汝愚かなり。少なきを捨てて多きを取るの執、須弥よりも高く、狭きを軽んじ広きを重んずるの情、溟海よりも深し。今の文の初後は、必ず多きが尊く少な

きが卑しきにあらざること、前に示すがごとし。ここにまた、小が大を兼ね、一が多に勝るということ、これを談ぜん。彼の尼拘類樹の実は、芥子三分が一のせいなり。されども五百輛の車を隠す徳あり。これ小が大を含めるにあらずや。また如意宝珠は、一つあれども万宝を雨らして欠くるところこれ無し。これまた少なきが多きを兼ねたるにあらずや。世間のことわざにも「一は万が母」といえり。これらの道理を知らずや。詮ずるところ、実相の理の背契を論ぜよ。あながちに多少を執することなかれ。

汝至って愚かなり。今、一つの譬えを仮らん。夫れ、妙法蓮華経とは、一切衆生の仏性なり。仏性とは法性なり。法性とは菩提なり。いわゆる、釈迦・多宝・十方の諸仏、上行・無辺行等、普賢・文殊、舎利弗・目連等、大梵天王・釈提桓因、日月明星・北斗七星・二十八宿・無量の諸星、天衆地類・竜神八部・人天大会・閻魔法王、上は非想の雲の上、下は那落の炎の底まで、あらゆる一切衆生の備うるところの仏性を、妙法蓮華経とは名づくるなり。されば、一遍この首題を唱え奉れば、一切衆生の

仏性が皆よばれてここに集まる時、我が身の法性の法報応の三身ともにひかれて顕れ出ずる、これを成仏とは申すなり。例せば、籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる、これを見て籠の内の鳥も出でんとするがごとし。

ここに愚人云わく、首題の功徳、妙法の義趣、今聞くところ詳らかなり。ただし、この旨趣、正しく経文にこれをのせたりや、いかん。

聖人云わく、その理詳らかならん上は、文を尋ぬるに及

ばざるか。しかれども、請いに随ってこれを示さん。法華経第八の陀羅尼品に云わく「汝等はただ能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら、福は量るべからず」。この文の意は、仏、鬼子母神・十羅刹女の法華経の行者を守らんと誓い給うを讃むるとして、汝等「法華の首題を持つ人を守るべし」と誓うその功徳は、三世了達の仏の智慧もなお及びがたしと説かれたり。仏智の及ばぬこと何かあるべきなれども、法華の題名受持の功徳ばかりはこれを知らずと宣べたり。法華一部の功徳は、ただ妙法等の五字の内に籠もれり。

一部八巻、文々ごとに二十八品生起かわれども、首題の五字は同等なり。譬えば、日本の二字の中に六十余州・島二つ、入らぬ国やあるべき、籠もらぬ郡やあるべき。飛鳥とよべば空をかけるものと知り、走獣といえば地をはしるものと心うる。一切、名の大切なること、けだし、もってかくのごとし。天台は「名は自性を詮じ、句は差別を詮ず」とも、「名は大綱なり」とも判ずる、この謂いなり。また名は物を召めす徳あり、物は名に応ずる用あり。法華題名の功徳も、またもってかくのごとし。

愚人云わく、聖人の言のごとくんば、実に首題の功、莫大なり。ただし、知ると知らざるとの不同あり。我は弓箭に携わり、兵杖をむねとして、いまだ仏法の真味を知らず。もししからば、得るところの功徳何ぞそれ深からんや。

聖人云わく、円頓の教理は初後全く不二にして、初位に後位の徳あり。「一行は一切行」にして、功徳備わらざるはこれ無し。もし汝が言のごとくんば、功徳を知って植えずんば、上は等覚より下は名字に至るまで得益さらにあるべからず。今の経は「ただ仏と仏とのみ」と談ずるが故

なり。譬喩品に云わく「汝舎利弗すら、なおこの経においては、信をもって入ることを得たり。いわんや余の声聞をや」。文の心は、大智舎利弗も、法華経には信をもって入る。その智分の力にはあらず。いわんや自余の声聞をやとなり。されば、法華経に来って信ぜしかば、「永く成仏せず」の名を削って華光如来となり。嬰児に乳をふくむるに、その味をしらずといえども、自然にその身を生長す。医師が病者に薬を与うるに、病者薬の根源をしらずといえども、服すれば任運と病愈ゆ。もし薬の源をしらずと云

って医師の与うる薬を服せずば、その病愈ゆべしや。薬を知るも知らざるも、服すれば病の愈ゆること、もってこれ同じ。

既に仏を良医と号し、法を良薬に譬え、衆生を病人に譬う。されば、如来一代の教法を擣き篩い和合して、妙法一粒の良薬に丸ぜり。あに、知るも知らざるも、服せん者、煩悩の病愈えざるべしや。病者は、薬をもしらず、病をも弁えずといえども、服すれば必ず愈ゆ。行者もまたしかなり。法理をもしらず、煩悩をもしらずといえども、た

だ信ずれば、見思・塵沙・無明の三惑の病を同時に断じて、実報・寂光の台にのぼり、本有三身の膚を磨かんこと疑いあるべからず。されば、伝教大師云わく「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」と。法華経の法理を教えん師匠も、また習わん弟子も、久しからずして法華経の力をもって、ともに仏になるべしという文なり。

天台大師も、法華経に付いて、玄義・文句・止観の三十巻の釈を造り給う。妙楽大師は、また釈籤・疏記・輔行の三十巻の末文を重ねて消釈す。天台六十巻とはこれなり。

玄義には、名・体・宗・用・教の五重玄を建立して、妙法蓮華経の五字の功能を判釈す。五重玄を釈する中の宗の釈に云わく「綱維を提くに目として動かざること無く、衣の一角を牽くに縷として来らざること無きがごとし」。意は、この妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功徳として来らざることなく、善根として動かざることなし。譬えば、網の目無量なれども一つの大綱を引くに動かざる目もなく、衣の糸筋巨多なれども一角を取るに糸筋として来らざることなきがごとしという義なり。さて、文句には「か

くのごときを我聞きき」より「礼を作して去りにき」まで、文々句々に因縁・約教・本迹・観心の四種の釈を設けたり。次に止観には、妙解の上に立つるところの観不思議境の一念三千、これ本覚の立行、本具の理心なり。今ここに委しくせず。

悦ばしいかな、生を五濁悪世に受くといえども、一乗の真文を見聞することを得たり。熙連恒沙の善根を致せる者、この経にあい奉って信を取ると見えたり。汝、今、一念随喜の信を致す。函蓋相応、感応道交疑いなし。

愚人頭を低れ、手を挙げて云わく、我、今よりは一実の経王を受持し三界の独尊を本師として、今身より仏身に至るまで、この信心あえて退転無けん。たとい五逆の雲厚くとも、乞う、提婆達多が成仏を続ぎ、十悪の波あらくとも、願わくは、王子覆講の結縁に同じからん。

聖人云わく、人の心は水の器にしたがうがごとく、物の性は月の波に動くに似たり。故に、汝、当座は信ずというとも、後日は必ず翻さん。魔来り鬼来るとも、騒乱

することなかれ。夫(そ)れ、天魔(てんま)は仏法(ぶっぽう)をにくむ、外道(げどう)は内道(ないどう)をきらう(嫌)。されば、猪(い)の金山(こんぜん)を摺(す)り、衆流(しゅる)の海(うみ)に入(い)り、薪(たきぎ)の火(ひ)を盛(さか)んになし、風(かぜ)の求羅(ぐら)をまして増(ま)すがごとくせば、あに好(よ)きことにあらずや。